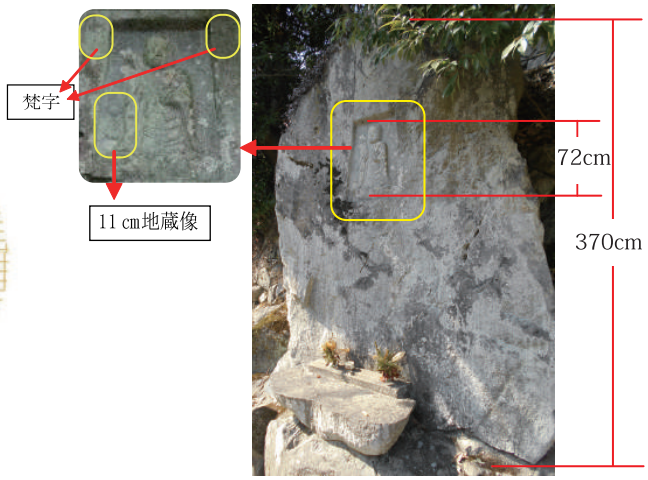
木代三位塚の地蔵磨崖仏

分類　磨崖仏
年代　室町末期と推定
所在　木代門所

木代消防団建物前、三位橋手前の細い道を少し入った左側に大きな一枚岩がそそり立っている。この岩に「サンミさん」（サイメさん）と呼ばれている地蔵菩薩が彫られている。「サンミさん」とは、当地方の開発の祖といわれている貝川三位長乗の徳をたたえた呼称で、この磨崖仏は、後世の人が貝川三位の徳を顕彰して造建したものといわれている。

年代の銘は見られないが、像の様式から見て室町末期の造立と思われる。岩面の中央部に上辺四四cm、下辺五二cm、高さ七二cmの台形の彫り込みをつくり、その中に地蔵立像を薄肉彫りしている。像は、右に短い錫杖、左手に宝珠を持ち、大きい丸顔に細い眼、三等身で太短くつくられている。頭光は宝珠形で左の方に梵字「カ」（地蔵の梵字）を刻んでいる。

地蔵の右袖の脇をよく見ると、像高十一cmの地蔵像と思われるものが薄く彫られており、掘り込みの外には左右に「タラーク」、「バン」の梵字あるいは五仏か十三仏の梵字が刻まれていたものと思われる。



木代走落神社の鳥居

分類　鳥居
年代　宝永四年（一七〇七）
所在　木代

走落神社は、「延喜式」神名帳の嶋下郡十七社のうちに記される式内社で、もとは切畑の藤の森に鎮座したと伝えられる。現在の鎮座地は、もと走落神社の相殿神であった天照大神を分祀して祭った小玉神社のあったところである。明治四〇年（一九〇七）の神社合併に際し、当時の東能勢村内十社祭神をここに合祀し、由緒ある走落神社の社号を復活した。

石の鳥居（明神鳥居）には、次の銘文が刻まれている。向かって

右柱　宝永四年丁亥歳六月吉祥日
左柱　摂刕能勢郡三箇庄大圓村藤宮

とある。三箇庄とは（木代、切畑、大円）のことである。

一七〇七年に切畑藤森に建立されたものである。

明治三十九年、神社合併が行われ、翌四〇～四一年にかけて、東能勢村にあった九つの神社を合祀した時に現在地に移設されたものである。

右柱　宝永四年丁亥歳六月吉祥日
左柱　摂刕能勢郡三箇庄大圓村藤宮

木代走落神社の石燈籠

分類　燈籠
年代　寛文七年（一六六七）
　　正徳元年（一七一一）
所在　木代走落神社境内

大婦天皇御寶前

牛頭天王（一対）

【大婦天皇】

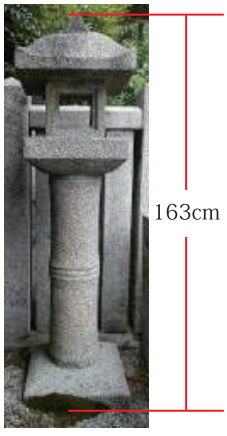
「大婦天皇御寶前」「正徳元年九月吉日」と刻まれている。合祀前の東能勢村十社のうち、余野にあった天武天皇宮から移されたものである。天武天皇宮は、柏尾宮、大武天皇宮とも呼ばれていたので、大武を大婦の字にあてて表わしたものと推定される。正徳元年（一七一一）に建てられたものである。

【牛頭天王】（ごずてんのう）

十六世紀後半の天正年間（一五七三～一五八二）頃、牛頭天王は織田信長の産土神（うぶすなのかみ）であったといわれている。信長が神社仏閣を焼き打ちした時にも、牛頭天王を祀る神社はその難を逃れたといわれている。この燈籠は寛文七年（一六六七）に建てられたものである。

191cm

（正面）大婦天皇御寶前
（裏面）正徳元年九月吉日



163cm

（右面）三ヶ庄切畑村岩寛文七丁未稔
（左面）奉造立石燈籠摂刕能勢郡　正月吉日

163cm

（右面）奉造立石燈籠摂州能勢郡
（正面）牛頭天王御賽前
（左面）郡三ケ庄

木代朝川寺地蔵石仏

分類　地蔵石仏
年代　文政七年（一八二四）
所在　木代朝川寺境内

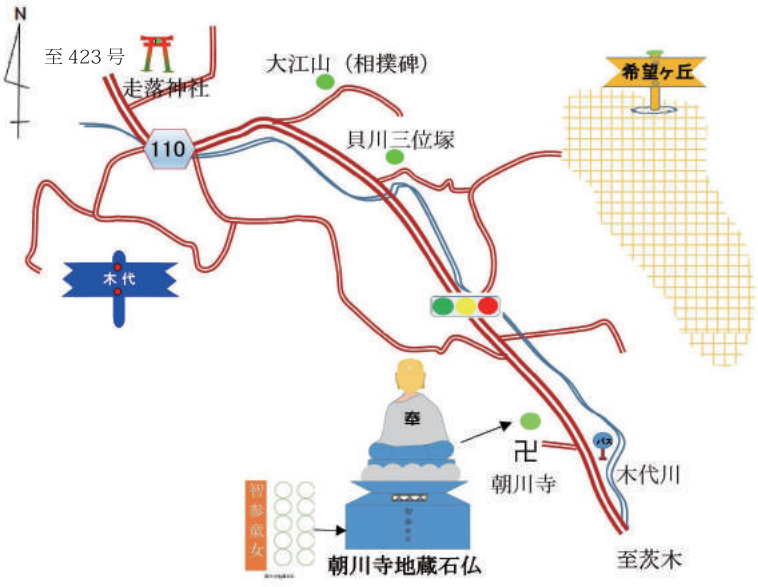
本堂の左側に、蓮台とも四四・五㎝の小さなかわいい地蔵石仏がある。

文政七年（一八二四）の造立で、台石に両親と思われる法名に並んで「智参童女」の文字が刻まれている。

幼くして先立った子供への思慕と慈愛から、せめてあの世なりとも親のもとにおいてやりたいとの、願がこめられているのであろう。

地蔵石仏は、伏目がちに見開いた眼、きりりとした口もとにあご、大きな耳、肩を落として思いに沈んだ聡明そうな顔姿が印象的である。

この地蔵は檀家の墓地にあったものを寺の境内に移したものといわれている。



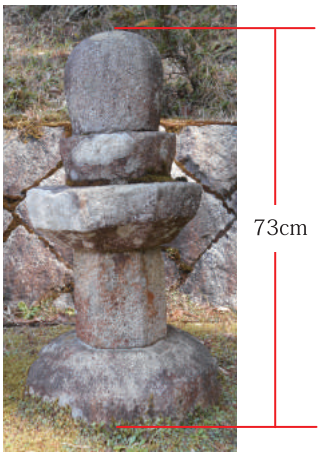
木代朝川寺無縫塔

分類　無縫塔
年代　室町時代と推定
所在　木代朝川寺境内

無縫塔は、四角または八角の台座の上に安置し、塔身が卵形の石塔で、卵塔・欄塔ともいう。

『朝川寺由緒書』によると、朝川寺は室町時代の応仁・文明の頃（十五世紀後半）石清水八幡宮善法寺家によって建立され、はじめは大円にあったが、まもなく木代に移建されたという。当時、木代荘と呼ばれた当地は善法寺家の重要な地であり、朝川寺は同家祈願寺となり、戦国期にかけては中央に連動する地位にあった。

現存する数基の無縫塔の中には、基礎を失ったものもみられるが、中台・基礎の文様・形態などからみて、いくつかの無縫塔は同寺の創建時とそれ程遠くない時期のものと思われる。



木代朝川寺門狸禁葷酒
境中制殺生（結界石）

分類　葷酒塔（結界石）
年代　不詳
所在　木代福田

曹洞宗の門前には「不許葷酒入山門」（くんしゅさんもんにはいるをゆるさず）の石柱を目にすることが多い。

朝川寺には参道階段中ほどの右側「門狸禁葷酒」の石柱が建っている。

※葷はネギ・ラッキョウ・ニンニク・玉ネギ・ニラのことという。

また左側にはもう一つの結界石があり、「境中制殺生」の刻銘が見られる。これは、ここより、一切殺生を禁ずるとする結界を示したものである。

朝川寺門狸禁葷酒　境中制殺生

（正面）門狸禁葷酒
（裏面）二十一世代
施主　門富ノ丈
※二一代啞峒仙外大和尚

木代たぬきやぶ多尊磨崖仏

分類　磨崖仏
年代　天正二年（一五七四）
所在　木代平野

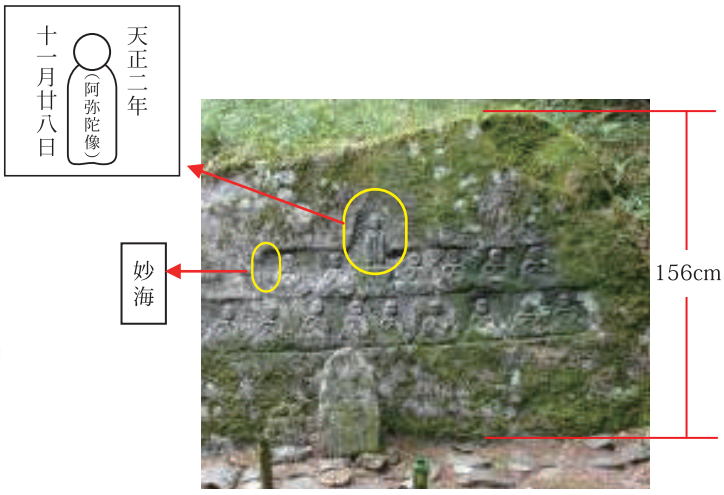
木代界橋を山手に登った通称「たぬきやぶ」の竹林の中を歩いて行くと旧道の道端に高さ一五六cm、幅四〇〇cm程の大きな自然石がある。

その自然石に二段にわたって十数体の石仏が彫られている磨崖仏がある。中央舟形に阿弥陀像が彫られ、それをはさんで

天正二年
十一月廿八日

の銘がある。桃山時代の作で、中央阿弥陀像の両脇には長方形の枠内に地蔵坐像が左に二体、右に四体、下段に同じく十体横並びに彫られている。十六体の地蔵像の右肩には、よく見るといずれも法名と思われる刻銘が見られる。特に上段左端の地蔵像の一体には「妙海」とはっきり読み取ることができる。これらの地蔵像は造立願主の逆修仏であることをしめしている。

当地にある多尊石仏は造立の時代もにかよっている。いわゆる逆修仏として自分の後生安楽を願うために何人かが結集して造立したものと思われる。この十六体の像は、地蔵像ではないという説もある。なにぶん苔むして、風化も激しいので今後の研究課題としたい。



木代頂応寺跡石風呂
（府指定文化財）

分類　石風呂
年代　鎌倉時代と推定
所在　木代福田

木代福田の集落から東へ約一㎞東の山麓に頂応寺跡がある。石風呂は頂応寺の堂跡にあり、五〇㎝ほどの水路に沿って置かれている。

石風呂の形状は、隅丸方形をしている。残念なことに中央部付近で二つに破砕され、上端部のいたるところが欠損している。底部の南側に蒲鉾状をした水抜き孔がある。

なお、頂応寺前を通る道は、余野越街道として東能勢（現豊能町東部）から多留見峠を越えて西国街道へ出る重要なルートであった。今は通る人もほとんどいない。また頂応寺跡の周辺からは鎌倉初期の瓦器の破片が多数出土し当時隆盛であったことがうかがわれる。

製作は鎌倉時代と推定されている。同石風呂は、昭和四九年三月、切畑の法性寺石風呂とともに大阪府有形文化財に指定された。

外法(cm)			内法(cm)		
長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ
230	140	80	173	86	58

木代善福寺跡（六十六部供養塔）

分類　供養塔（六十六部供養塔）
年代　文政十一年（一八二八）
所在　木代縁の間

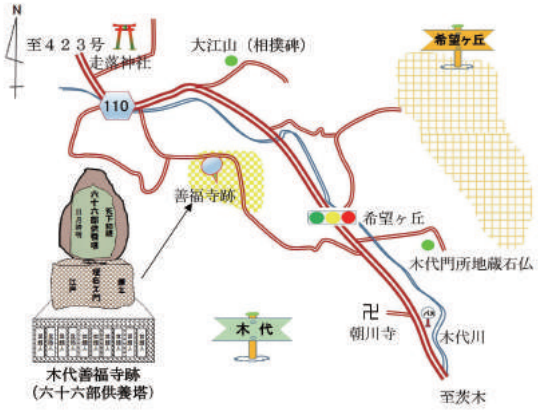
この塔は、六十六部行者と呼ばれ、法華経を書写し、全国の六十六カ国の霊場を遍歴、一部ずつ納経し、満願成就の記念に建立する場合が一般的である。

鎌倉時代から流行し、江戸時代には諸国の社寺に参詣する巡礼、または遊行の聖（僧）であった。白衣に手甲・脚絆（きゃはん）・草鞋（わらじ）がけ、背に阿弥陀像を納めた長方形の龕（がん）を背負い、六部笠をかぶった姿で諸国を回っていた。

この供養塔は、世の人が仏法と縁を結ぶために経文、法華経を書写して供養するために建立したものと思われる。結縁経（けちえんぎょう）ともいわれ、善福寺から「恵龍河阿闍梨」ほか、複数の阿闍梨がでている。いずれも六十六部の聖であったと推測される。

本町において、この種の供養塔の事例は今のところ見つかっていない。近世における巡礼行者信仰のあり方を考える上で貴重な塔である。なお、善福寺歴代の尊師のお墓は木代朝川寺墓地にある。

また、現在は個人の敷地内に安置されている。



（裏面）文政十一年戊子六月
（正面）六十六部供養塔
天下和順
日月清明

不明
（右面）
眞■戒
天■真■
同　連心
同　了應
江戸佐吉
鏡貳茂八
播刕玉真
大阪富茂

（正面）願主
理右衛門
江戸

（左面）江戸鉄之助
同　やろ

世話人
京都　平野屋久兵エ
同　伊勢屋吉左エ門
大阪　堺屋安右エ門
（正面）
同　伊勢屋忠右エ門
當村若連中
廻国
同　江戸平八
京都定吉

福井　石立市右エ門
宿
（裏面）前忠左エ門
惣五世話人
勇久　忠兵エ門

木代高岡山の寺院跡石燈籠

分類　燈籠
年代　享保十八年（一七三三）
所在　木代高岡

木代字高岡山の山頂に寺院跡がある。通称高床山、龍王山とも呼ばれている。境内跡に一対の石燈籠が建っている。

『享保十八（一七三三）癸丑（みずのとうし）歳、奉寄進石燈籠、正月吉日、施主、福田谷中、念仏俗立是』が刻銘されている。

山頂の巨木の「雨乞いの松」（直径七三㎝）、檜（直径八七、五㎝）は、村のシンボルとなっている。遠い昔、干天時には村人は「雨乞いの松」に集まり、雨乞いの神事を行っていた。

また豊能町の民話、『太鼓の上手なてんぐさん』の舞台にもなっている。

（右面）享保十八癸丑歳
（正面）奉寄進石燈籠
（左面）正月吉日　施主
福田谷中
（裏面）念佛俗立是

木代法華塔（兼道標）

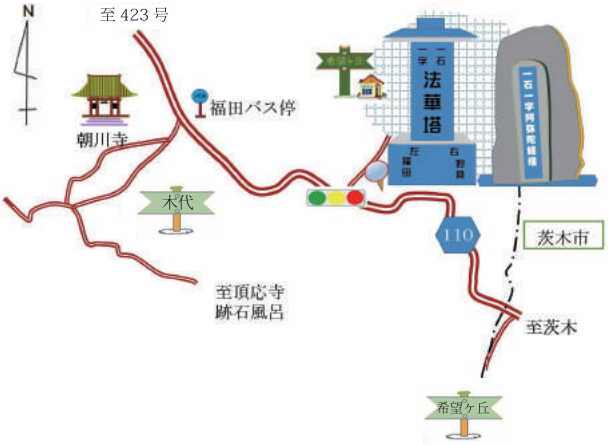
分類　一石一字塔
年代　天保五年（一八三四）
所在　木代

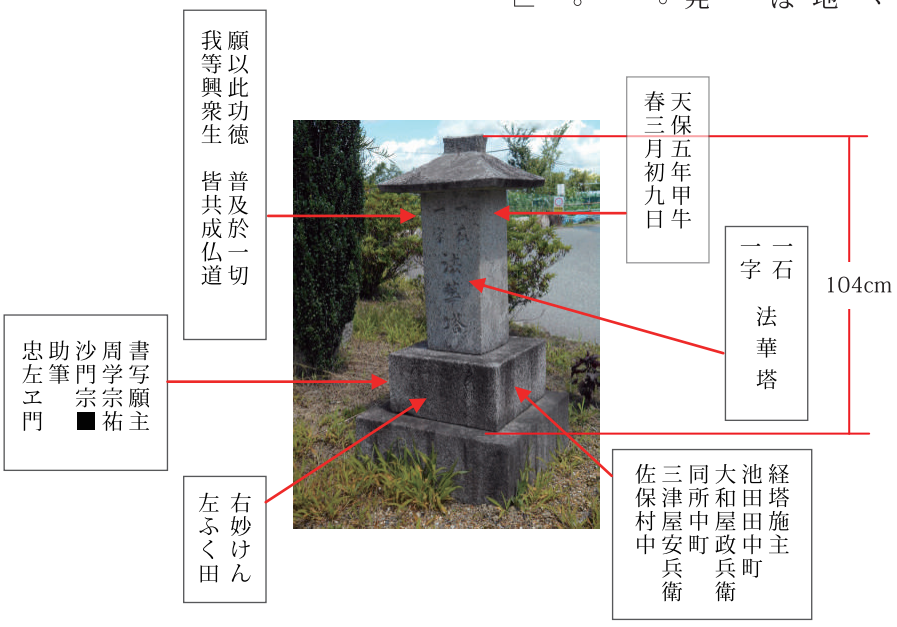
一石一字法華塔は小石に一字ずつ経文を書き写し、これを地面に埋め、その上に石塔を建てたものである。

豊能町域の一石一字法華塔は、今のところこの一基のみである。経典は六九三八四字あり、これを書き写し、人々の身の安全、さらには地域の人たちを護ったものと思われる。この塔は道標の役目も兼ねていた。

この塔は、木代地区内の工事現場において発見されたが、現在は個人の敷地内に建っている。

（注）移転時、基の正面基壇の配置と違っている。当初は、基壇（裏）に「右妙けん」「左ふく田」となっていたと思われる。





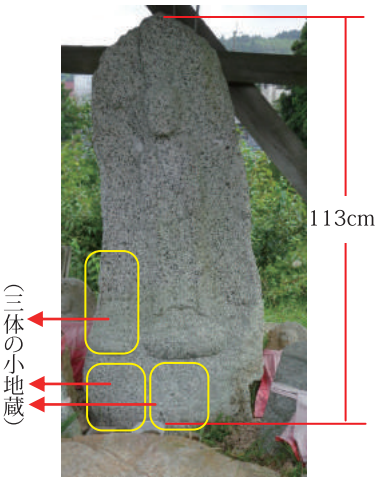
木代門所地蔵石仏

分類　地蔵石仏
年代　不詳
所在　木代

木代・切畑間の里道は、木代小字門所の亀岡街道と切畑小字風呂前を結ぶ要路であった。日常の作業道・生活道として、また妙見参詣道としても利用されていたようである。

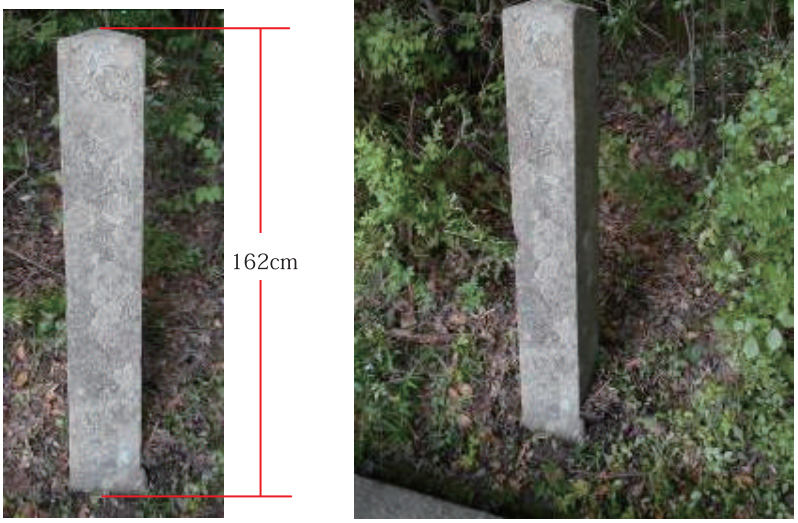
この里道沿い、木代尚武橋より東二〇〇m程いった築山に地蔵石仏が建っている。無銘の石仏で詳細は不明である。中央に錫杖を持った地蔵が厚肉彫りされる。地蔵の下部に、逆修仏と思われる三体の小地蔵が彫られている。

この石仏の背面中央に縦に溝が彫られている。これは何を意味するものかはわかっていないが、他に類のないものである。



木代亀岡街道の道標（多留見峠）

分類　道標
年代　不詳
所在　木代



天正の末期、キリシタン大名高山右近は信長の命により余野城を攻めている。城に降伏の使者を送るが難航し、ついに余野城に火が上がる。その様子を右近は多留見峠で見ていたという郷土の歴史に残る多留見峠に『亀岡街道の道標』が立っており、次のように刻銘されている。

右面　至丹波国境　一里十三丁五十間

正面　亀岡街道　高麗橋　元標八里

左面　福井村　遍照寺橋　二里十三丁五十間
　　茨木停車場　三里二十三丁五十間

現在の府道一一〇号線（上音羽）沿いに立っているが、元は多留見峠にあったものである。

茨木市の道標の冊子には、「下の村落内にあったのではなかろうか」と記されている。下とは、豊能町木代（福田）を指している。今設置されている場所は、亀岡街道から少し外れている。

上牧・高槻・茨木方面から旧東能勢村に入る戸口（入口）として、三島郡との国境に多留見峠がある。かつては余野から木代（福田）をとおり、多留見峠を越え、茨木・高槻へ交通・物流、そして妙見山参詣の要の役割を担っていた。

大阪の道路里程元標が、明治九年（一八七六）十二月に高麗橋東詰北側に設置された。道標の「亀岡街道　高麗橋　元標八里」というのは、多留見峠までの距離を示したものである。高麗橋が亀岡街道の起点となっていた。

「至丹波国境　一里十三丁五十間」は留見峠から清阪峠までの距離であろう。清阪峠には明治九年（一八七六）九月に、摂津国と丹波国の境界を示す道標が立てられている。「福井村遍照寺橋」は現在の新屋橋と思われる。「茨木停車場」は京都、大阪間で停車場は山崎・高槻・茨木・吹田だけであった。それぞれ多留見峠からの距離を示したものと思われる。